



木村清次先生の追悼文集

前回の広報誌で予報していました通り、今回は木村清次先生の追悼文集を組みました。先生は2008年から約10年間、幡多希望の家でお働きくださり、幡多希望の家をこよなく愛してくれました。都会にお住いの先生でしたが、趣味の釣りを通して、この自然溢れた幡多の地が大好きになりました。土佐の海で大きなカンパチやタイなどを釣り上げた先生の在りし日の雄姿が思い浮かびます。先生と親交のあった職員6名に追悼文を書いていただき、以下に掲載いたしました。



故 木村清次先生



“宿毛湾での大成果と“先生のドヤ顔”



① ～木村清二先生を偲んで～

副施設長；山口 卓郎

今年の春先に木村先生から、施設に手紙が届きました。そこには宿毛の海で大きなカンパチを釣り上げ、笑っている木村先生の顔がありました。しかしその数日後に突然の訃報を聞き我々一同は、本当に驚き深い悲しみでいっぱいでした。

木村先生の突然の訃報を受けてから、はや3ヶ月が経とうとしております。木村先生には、幡多希望の家に2008年10月より2018年12月までの10年間勤務いただき、長きにわたり幡多希望の家に係る利用者の方々や、地域の医療に情熱をもって携わって頂きました。

木村先生の「自分が働くからには365日24時間困っている人がいれば、どのような障害があっても、いつでもだれにでも協力する」との思いに、他の先生方や職員一同も強く賛同を示しました。先生は、休日でも夜間でも体調を崩された利用者がいれば、入所利用者に限らず、幡多希望の家に係る全ての人に対し、分け隔てなく、いつも優しい眼差しで医療提供をして頂きました。木村先生のおかげで、利用者・家族・職員がどれだけ「安堵感」を頂いたかわかりません。一見ぶっきらぼうな木村先生でしたが、本当に利用者側に立って医療を提供していただきました。木村先生のおかげで、幡多希望の家がよりしっかりと医療を提供できる施設に成長できたと思っております。

今後は天国で、タバコ吸いながら、ゆっくり好きな海釣りを存分楽しんでください。

終わりに、本当は言いたくないお別れの言葉を述べさせていただきます。

木村先生、長い間、本当にありがとうございました。 さようなら。





② ～潮風にのせて～

総務部・総務課長； 坂本 真由美

木村先生のご生前のお姿を偲びつつ、追悼文を書かせていただきます。

突然の訃報に、私たち職員は勿論の事、先生を慕っておられる利用者さんやご家族からは、未だに信じられないという悲しみのお言葉を頂戴しています。

私の中の木村先生は、朴訥な方というイメージでしたが、時折、ニタリと笑ってジョークを飛ばしてくださる面白い一面もあって、やりとりさせていただいた何気ない場面が懐かしく思い出されます。

横浜に帰られてからは、機関誌をお送りする度に、必ずメールで感想を寄せてくださいました。昨年秋頃、届いたメールには「職員の寄稿が少なくて希望の家の雰囲気が感じられないのが残念です」（原文のまま）と書かれており、とても心が痛みました。幡多希望の家の機関誌を楽しみに待っていてくれる方がいるということ、改めて木村先生が教えてくださったことに感謝しています。

木村先生！今回の機関誌の出来はどうでしょうか？

天国からの感想をお待ちしています。



③～木村先生と在宅利用者家族との思い出～

在宅支援部・在宅支援科長； 岡村 あき

木村先生のご訃報に接し、心から先生のご冥福をお祈りいたします。

生前の先生との思い出を少し書かせてもらい、追悼の文とさせていただきます。

今年の春、木村先生から1枚の葉書を頂き、その内容を職員一同と読みながら「木村先生らしい文章やね。元気でおられるろうかね？」と懐かしく話をしていました。しかし、その数日後にお亡くなりになられたと聞いて、とても信じられませんでした。今でもいつかひょっこり顔をみせてくれそうな気がしてなりません。本当に寂しい限りです。

先生がこちらに赴任した理由は、嘘か真か「宿毛は海が近くて、いつでも趣味の釣りに行けるから」と笑顔で言われていたこと思い出します。実際、休日には、よく柏島や橘浦に行き、船釣りに出かけていましたよね。また、三原に麻雀仲間がおられたようで、夜な夜なお出かけしていたと聞いたこともあります。

色んな話もありますが、ここからは在宅の利用者との話をしていきたいと思います。先生は、いつも利用者目線で診察をしてくださり、在宅の保護者にも、「昼でも夜でも、具合が悪くなったら携帯に電話しておいで。」といつも言われていました。その為、在宅の保護者からは「先生がいてくれるから、安心して自宅で生活を送られる。本当に、有り難いし心強い。」とよく言われていました。先生が希望の家を辞められると聞いた時は、在宅の保護者がたくさん集まり、先生を囲んでのお別れの会を催したとのことでした。その頃既に体調が悪く、「最近、食欲がなくなった」と漏らしていた先生も、お別れの会では「おいしい料理で、いつもよりたくさん食べて、嬉しかった。」と、楽しそうに話をされていました。

横浜での闘病生活の中でも、この“幡多希望の家”のことをいつも心に留めてくださっていたと聞いています。私たちは、そのような先生の優しさをいつまでも忘れません。

最後に、“幡多希望の家”の在宅の利用者・保護者・在宅職員一同より、それぞれの心にある、たくさんの感謝を申し上げます。

木村先生、本当にありがとうございました。





④～あたたかかった木村先生～

診療部・薬剤科； 大橋 富貴子

木村先生はてんかん専門医として高知県に赴任して来られました。

とても有名な先生なのか、製薬会社のMRさんは商品説明などに緊張して対応していましたが、私達にはとてもそんな風に見えず、気さくに優しく接して頂きました。

新しい抗てんかん薬が次々と発売された時期と重なり、入所者の処方が続々と変わっていき、調剤が大変でした。でもその中で、副作用の出やすい薬ではとても慎重に処方されていて、木村先生の患者さんへの気持ちが伝わってくるようでした。大胆で繊細な処方だなと感じ入りました。

お陰様で色々勉強させて頂き、感謝しています。

女性薬剤師会の講演依頼には快く応じて頂き「てんかん」について分かり易く話して頂きました。その時の自己紹介では「半漁半医師」です」と仰るほど、釣りに夢中の先生でしたね。そのような事も懐かしく思い出されます。

外来のこども達、保護者のお母さん達、利用者、職員、皆から慕われた先生でしたので、とても寂しい想いで一杯です。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



⑤～木村先生ありがとうございました～

看護部・看護科主任； 山口 順

木村先生長い闘病生活お疲れ様でした。痛みや苦しみも強くあったでしょうが、家に帰り、懐かしく、ぬくもりのある日々を送り、幸せな時間を過ごされたと思います。空の上では、「今日も大漁」と、大好きな釣りや麻雀を楽しまれているのではないのでしょうか？近くの宿毛の海を見るたびに、先生のことを思いおこされ、心を強くされ、寂しさを感じる事が少なくなりました。

こちらは、利用者さんや職員も高齢となり、忙しい日々を過ごしています。去年新しく、2歳になる女の子が入所し、その天使の笑顔に毎日癒されています。しかし、新型コロナウイルスの蔓延で外出や面会の制限があり、利用者さんや職員は憂鬱な気持ちで、日々を過ごすことがあります。そんな中でも、ゲームやお茶会をして、小さな楽しみを見つけ頑張っています。暗い世の中ですが、利用者さんやご家族の気持ちに寄り添い、しっかり向き合うことを大切にして、信頼関係が築けるような看護ケアを提供していきたいと思います。

私自身、日々穏やかな気持ちで利用者さんに接しているのか不安になることがあります。間違ったことをしていたら、いつでも夢に出てきてご指導下さい。

これからも、大きな広い心を持った海から、見守っててください。

先生ゆっくりと休んで下さいね。

ありがとうございました。





⑥～木村先生ありがとうございました～

看護部・看護科； 増田 仁

先生今何をしていますか？ 今頃天国で、好きな釣り・麻雀・温泉浴をしているのでしょうか。それとも静養中ですか。もちろん好きなタバコを片手に、馴れ親しんだ宿毛湾、橘湾を眺めながら楽しんでいられるのでしょうか。

思いおこせば10年前、幡多希望の家に就任された先生の最初の言葉、「俺はなあー、海が見える老人ホームを探しに宿毛に来たんだよおー」が印象的でした。また「おめーはなあー、釣りするか？」との言葉が、師匠と弟子の“釣りバカ・コンビ”の始まりでした。

以降、互いの休みの時には、愛媛県や宿毛市での筏釣りを大いに楽しみました。奥様からは、先生と同じライフジャケットをいただき、揃いの格好であちこちに出かけました。ジャケットは今でも大事に使っています。大月町橘湾での船釣りで、「海老で鯛を釣るのは知っていたが・・・サビキ（擬餌針）で鯛を釣るのは初めてだぜいー」と大喜びしていた先生の姿が目に焼き付いています。昼には船上で釣った魚の刺身を食べ、夜には医師住宅で、大漁の祝杯をあげながら、刺身・魚の唐揚げ・鍋等で腹一杯になりました。また夜の街にでかけたり、温泉での裸の付き合いなど、楽しい思い出がいっぱいです。

10年が経とうとした時に、胸部CTで肺癌が見つかりました。その時の先生の言葉は、「オベはしないよ。これ以上長生きしてもなあー・・・」でした。その後もいつもと変わらない態度で、日々の診療を行っていました。約半年後、先生から「身体がいうことをきく間に、辞める」との言葉を聞き、先生の退職を知りました。横浜に帰ってからは、僕には余りメールは無かったのですが、女性職員には時々連絡があったようでした。最後の連絡は、昨年宿毛でコロナが発生した時の、「夜の街・禁止」の一言メールでした。

5月のある日、病棟に木村先生からの葉書が舞い込みました。その葉書には宿毛湾で釣れた思い出のカンパチを抱いた笑顔の先生の写真が載っていました。「今頃、何故？」との疑問を発すると、「木村先生、亡くなったがやとー」との職員の一言。思わず涙が滲んできて、その場を離れて男泣きに泣きました。何故なんだ。コロナさえなければ会えていたのに・・・、悔やみます。それからしばらくして、奥様から職員へ、手紙とサブレが届きました。手紙には、「先生の遺言で、四十九日法要時にサブレを送ることになったいきさつ」が書かれていました。亡くなられた時、そして四十九日法要の時にも、幡多希望の家のことを忘れずにいてくれたことを知り、また涙が出ました。

“泣き虫弟子”の僕は、木村先生から教えて頂いたことを一生忘れません。先生が愛してくれたこの幡多希望の家で、先生を思い出しながらこれからも頑張ります。

いずれは僕も参ります。それまでは空の上で眺めていてください。
ではまた・・・。



追悼文編集後記；今回は、故木村清次先生を偲んでの追悼文集を合わせて組ませていただきました。多くの方からの文章をと思いましたが、紙面の都合上、6名の職員からのみとさせていただきます。なおこの追悼文集は、先生と親交のあったと思われる方へ、広報誌に同封して送付いたしました。改めまして、木村先生へ、謹んで哀悼の意を表します。<文責；河原敏郎>